

羽ばたけ

福岡・山口の
若手アスリート

37大会ぶり花園狙う

男子ラグビー

古城隼人さん(18)

福岡の高校ラグビー界で春の主役を張った修猷館の司令塔だ。全九州大会県予選では、準々決勝で全国選抜大会を制した東福岡を破って57年ぶりの頂点に立つと、続く全九州大会の本戦でも準優勝した。「試合にOBや保護者がたくさん応援に来てくれて幸せでした」。公立屈指の進学校が久々にみせた快挙に沸く周囲をよそに、浮足だった様子はない。

伝統の白と水色のストライプジャージーが映える。「最狂」のスローガン通り、突き刺さるようなタックルを見舞うフォワード陣に指示を

飛ばし、球を奪えばバックス陣に素早く展開するスタンドオフ。体格や個々の技術では強豪校に見劣りするだけに、試合の流れを見極めて勝機を探る10番の役割はとりわけ重要になる。

幼稚園から地元のクラブ「草ヶ江ヤングラガーズ」で競技を始めた。高校進学時は東福岡も選択肢にあった。しかし、当時修猷館で主将だった四つ上の兄・智也さんが、「花園」をかけた第90回全国高校大会県予選準決勝で筑紫に14-20で惜敗した姿を見て、進路を決めた。

1年生からスタメン入りしたが、秋にショッキングな出来事があった。花園予選の準々決勝で東福岡と対戦。「何もできなかった」。5-81で大敗した。卒業する永富健太郎主将(現同志社大)からのメッセージは「とにかく体を鍛えろ」。毎日筋トレを繰り返し「自分を追い込んだ」。体重は70kgから10kg増え、ベンチプレスも75kgが精いっぱいだったのが、今では100kg超を上げられるまでになったという。

2年生で高校日本代表候補に選ばれ、今年度も2019年に日本で開催されるワールドカップ(W杯)を見据えた日本協会の育成事業「U18

TIDユースキャンプ」のメンバーに修猷館から唯一選ばれた。協会の合宿は1日3部練習が当たり前でラグビー漬け。「W杯でラグビー人気を広げられるような選手になりたい」と刺激を受けたが、昨年参加したときは花園出場経験がない自分に対し、「自信の裏付けがなく、すごくやりづかった」と悔いが残った。

だからこそ、今年は修猷館では37大会ぶりとなる花園切符をつかみたい。「チームの一瞬の集中力は全国一。チャレンジャー精神で臨みたい」と秋の大一番を見据える。(金子智彦)

